

平成29年度 学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】中高一貫教育の特長を生かし、高い進路目標に向かって邁進する生徒を育て、その実現を図る。			
具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び後期の対応
① 校外模試等の結果を教科会や学年会で分析し、生徒にフィードバックするとともに、1ランク上の志望を持たせることにより学習意欲と学力の向上を図る。	1, 2年生校外模試の3教科全国偏差値60以上の生徒が A 30%以上である B 25%以上である C 20%以上である D 20%未満である  3年10月記述模試で5教科全国偏差値が文系で56以上、理系で54以上の現役生徒が A 35% (110人)以上である B 29% (90人)以上である C 23% (70人)以上である D 23% (70人)未満である	1年生7月進研模試 【判定：D】 3教科SS60以上 63名 (19.9%) (昨年同期 64名 17.9%)  2年生7月進研模試 【判定：C】 3教科SS60以上 75名 (21.6%) (昨年同期 104名 33.7%)  3年生7月進研模試 【現時点での仮判定：B】 5教科文系SS56以上 40名 5教科理系SS54以上 58名 合計 98名 (31.7%) (昨年同期 97名 32.0%)	1年生(8クラス)については、成績分布に例年と大きな違いは見られない。ただし、数学においてはSS65以上が若干少なく、SS50未満に小さい集団が見られる。 2年生(9クラス)については、1年次7月の判定はD、SS60以上の割合は17.9%であったことと比較すると、少しずつであるが、全体的に回復してきている。今後も成績層別の指導などの工夫をして、成績上位層に厚みを付けたい。 3年生については、全体では昨年度7月とほぼ同じ結果である。教科別に成績を見ると、数学や理科は良いが、英語は若干下降している。今後は、志望校別の添削指導などをさらに重視する一方で、教科バランスに注意しながら、学年をあげて弱点を補強する指導を行っていきたい。
	1, 2年生で難関大を志望する生徒が A 55名以上である B 45名以上である C 30名以上である D 30名未満である	4月進路志望調査 難関大志望者 1年生 59名 【判定：A】 2年生 52名 【判定：B】	1, 2年生ともに、難関大志願者数は50名以上いるが、2年生は昨年同期と比べると、17名減少している。超難関大(東京大学、京都大学)については1年生では16名、2年生では9名が志願している。高い学習意欲と進路目標は相関していると考え、学習意欲を高める授業と大学に関する適切な情報を提供を行い、生徒の高い志を育みたい。難関大志願者のモチベーションを維持、集団づくりなども重要な課題となる。
② 難関大学を中心とした高い進路志望の実現のため、入試分析や補講・添削等のサポート体制を強化する。	東大・京大及び国公立医学科の現役合格者数が A 3名以上である B 2名である C 1名である D 0名である  難関大及び金沢大の現役合格者数が A 70名以上である B 50名以上である C 30名以上である D 30名未満である	超難関・国立医学部の合格者数 【現時点での仮判定：C】  難関大および金沢大の合格者数 【現時点での仮判定：B】	*東大・京大の合格ラインを7月進研模試で文系SS76、理系SS74ラインとして判定する。文系は1名、理系0名、合計1名がその基準を満たす結果。(一昨年2名、昨年1名) *旧帝大等の合格ラインを7月進研模試で文系SS70、理系SS66ラインとして判定する。文系は4名、理系10名、合計14名がその基準を満たす結果。(一昨年7名、昨年10名) *金沢大ライン以上を7月進研模試で文系SS60、理系SS58ラインとして判定する。文系は25名、理系33名、合計58名がその基準を満たす結果。(一昨年52名、昨年54名)
③ CU(土曜補習)、補習を通して、より意欲的な学習の在り方へと切り替えさせる取り組みを行う。	「CUや補習は自分の学力向上に役立っている」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート(7月) 「学力向上に役立っている」68% (当てはまる19%+やや当てはまる49%) 【判定：C】	肯定的な評価は昨年同期に比べ2%減少した。学年間で差があり、1年生は75%、2,3年生は64%であった。補習が成績に直結するわけでないので、効果がないと思ったり、3年生で受験教科を絞り込んでしまっ、他教科に関心が向かないといったことが考えられる。扱う教材やクラス編成など工夫し、CUや補習の目的を明確に示すことで、生徒のCUや補習への取り組み姿勢を育みたい。
④ 中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ、学級担任や学年主任、教科担任等による積極的な面談を行う。	「ホーム担任や教科担任との面談によって、自分の学習姿勢により良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート(7月) 「より良い変化が生まれた」74% (当てはまる25%+やや当てはまる49%) 【判定：B】	肯定的な評価は昨年同期に比べ7%増加し、その中で「当てはまる」は6%増加した。また「学習に関する質問や悩みに対応してくれている」では6%、「学校生活に関する悩みに対応してくれている」では8%増加し、関係する3項目ともに大きく改善された。個人面談において、親身で適切なアドバイスが効果的に行われた結果である。ホーム担任のみならず学年組織として、今後、いっそう生徒理解に努め、細やかに面談をしていきたい。
⑤ 中高一貫教育校として6年間を見通した学習指導や進路指導を行う。	「中高一貫教育校として、6年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に、教科で取り組んでいる」と思う教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート(7月) 「取り組んでいる」55% (当てはまる11%+やや当てはまる44%) 【判定：C】	肯定的な評価は昨年同期に比べ6%増加した。「中高6年間を通じた学校設定科目を軸とした英語指導」「高校数学先取りを生かした数学指導」の検討や国語科・社会科・理科の中高接続を意識した取り組みの結果である。PTの取り組みだけではなく普段から中高合同教科会を開くなど、中高一貫教育の在り方を全体で継続的に共有したい。

**【重点目標2】 教科指導の質的向上に努めるとともに、あらゆる教育活動を通して生徒の論理的思考力や表現力の伸長を図る。**

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の対応
<p>① ICTの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業改善に取り組み、生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに、論理的思考力や表現力の育成を図る。また、各教科の特質を踏まえた言語活動を通して、「コミュニケーション力」の育成を図る。</p>	<p>「他の教員の授業を参観したり、自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が、錦丘中との交流を含め、年間4回以上あった」と思う教員の割合が</p> <p>A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である</p> <p>「授業でICTをよく活用している」「時々活用している」教員の割合が</p> <p>A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である</p> <p>「ICTを活用した授業により、学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が</p> <p>A 65%以上である B 55%以上である C 45%以上である D 45%未満である</p> <p>「授業の中に論理的思考力や表現力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が</p> <p>A 85%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である</p> <p>「授業の中に話し合いや発表などを通してコミュニケーション力を伸ばす場面がある」と思う生徒の割合が</p> <p>A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である</p>	<p>職員アンケート(7月)</p> <p>「1学期の間に3回以上あった」13% 「1学期の間に2回あった」52% 【現時点での仮判定：B】</p> <p>職員アンケート(7月)</p> <p>「活用している」74% (よく活用している53%+時々活用している21%) 【判定：A】</p> <p>生徒による授業評価(7月)</p> <p>「高まっている」54% (当てはまる27%+やや当てはまる27%) 【判定：C】</p> <p>生徒による授業評価(7月)</p> <p>「伸ばす場面がある」78% (当てはまる30%+やや当てはまる48%) 【判定：C】</p> <p>生徒による授業評価(7月)</p> <p>「伸ばす場面がある」72% (当てはまる32%+やや当てはまる40%) 【判定：A】</p>	<p>肯定的評価は昨年度同期と同じであった。詳細にみると「3回以上」は前年比-20%、「2回」が+20%であった。互見授業において「中学校・高校の授業を各1回参観する」としたことが要因と考えられる。新学習指導要領や高大接続改革も見据えて授業改善が求められていることを教員間で共有し、錦丘中の研究授業や後期互見授業を、自らの授業を振り返る絶好の機会として捉えられるように、教務課として旗振り役に努めていきたい。</p> <p>昨年度は「よく活用している」40%、「時々活用している」22%で合計が62%であった。「よく活用している」の数値が大きく増加した要因は、ICTの環境整備の進み具合と授業改善に取り組んだ結果である。単にプロジェクトを使うことではなく、タブレット端末を活用するなど、より高いレベルのICT活用に取り組みたい。</p> <p>肯定的評価は昨年度同期に比べ2%増加した。一昨年度48%、昨年度52%、今年度54%と順調に数字は増加しているが、職員の「活用している」が12%増加であったことを考えると、2%の伸び率は相関していない。本校のICT活用の目的は「学習効果を高める」ことにあるはずで、効果的な活用に繋がるよう実践を進める後押しをしたい。</p> <p>肯定的評価は昨年度同期とほぼ同じである。昨年度は「当てはまる」が27%、「やや当てはまる」が50%であった。高大接続改革対応のコアの部分である、「思考力・判断力・表現力」を評価することに対する意識が授業実践に繋がっていると考えられる。教え込み型の授業だけではなく、アクティブラーニング型授業にも学校全体で取り組み、論理的思考力や表現力を伸ばしたい。</p> <p>肯定的評価を教科別にみると、国語(79%)・地歴公民(70%)・数学(61%)・理科(46%)・外国語(90%)・保健体育(73%)で、数値のばらつきがみられる。コミュニケーション力の育成は、キャリア教育の視点からも育みたい能力であり、本校のスクールポリシーの柱の一つでもある。言語活動を重視したアクティブラーニング型授業に学校全体で取り組むことで改善に繋がりたい。</p>
<p>② 教科や総合的な学習の時間の内容を関連させ、表現トレーニング、プレゼンテーション、多文化共生理解などに取り組むことで、論理的・批判的に事象をとらえ、自らの考えを述べる力を育成する。</p>	<p>「さまざまな世界的・社会的事象に対して、より関心を持つようになった」と思う生徒の割合が</p> <p>A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である</p>	<p>生徒アンケート(7月)</p> <p>「関心を持つようになった」59% (当てはまる9%+やや当てはまる50%) 【判定：C】</p>	<p>昨年度は「当てはまる」が9%、「やや当てはまる」が47%で、昨年同期に比べ3%増加した。授業から動機づけられるだけではなく、「おもてなし講座」「ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業」「外部専門家等を活用した最先端分野を学ぶ授業推進事業」等の教科を越えた横断的な取り組みが、社会的関心に繋がっていると考えられる。</p>
<p>③ 高校の各年齢段階で求められる知識・教養・感性を身に付け、文章の理解力・表現力を育成するために、読書を奨励する。特に、各教科と連携し、読書指導を授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて行うことによって推進する。</p>	<p>「授業やシラバスの他、あらゆる機会をとらえて、生徒に適した書物を紹介し、読書量を増やすための指導をしている」教員の割合が</p> <p>A 50%以上である B 40%以上である C 30%以上である D 30%未満である</p> <p>生徒1人あたりの貸出冊数が</p> <p>A 年間8冊以上である B 年間6冊以上8冊未満である C 4冊以上6冊未満である D 4冊未満である</p>	<p>職員アンケート(7月)</p> <p>「読書量を増やすための指導をしている」34% (当てはまる5%+やや当てはまる29%) 推薦図書を紹介冊数 前期で平均2.0冊 【判定：C】</p> <p>7月末までの、生徒1人あたりの貸出冊数(図書館バーコードカウンターによる)</p> <p>1年 3.2冊 2年 1.9冊 3年 3.4冊 全学年平均 2.8冊 【現時点での仮判定：C】</p>	<p>昨年度から開始した「先生のお薦めの1冊」は、今年度は中学校にも協力をお願いして中高合同の取り組みとした。各先生方の読書指導の契機になることもねらっているこの取り組みだが、「生徒の読書量を増やすための指導をしている」教員は昨年度と比較して3%増加したものの、教員1人あたりの本の紹介冊数が年々少しずつ減少している点が気になる。教科にかかわらず、さまざまな場面で教員から働きかけをしていきたい。</p> <p>読書アンケート(5月)において、「本を読みたい気持ち」の項目で「ある」「ややある」と答えた生徒が全学年とも約6割以上あり、読書への意識はまずまず高いといえる。ただ、2年生で「全く関心がない」という生徒が2割で他学年に比較して多く、読書格差が気になる。今後は図書委員中心に「中高合同ビブリオバトル」や「図書館特設コーナー」を企画し合って、生徒達同士の働きかけによって読書への関心を喚起し続けていきたい。</p>

④ 学力スタンダードの到達目標の到達度をはかる問題作成を視野に置きながら、論理的思考力を高めるために必要な試験問題の作成について教科全体で検討する。	年間を通して論理的思考力を問う問題の割合(点数換算)の平均値が A 15%以上である B 10%以上である C 5%以上である D 5%未満である	1学期中間試験、期末試験の状況  【判定：B】	1学期中間試験、期末試験を確認したところ、どの教科も10点程度以上は思考力を問う問題が設定されている。今後の課題は、個人レベルだけではなく教科全体として思考力を問う問題を検討し、作問に繋げているかということにある。教務課として組織として思考力を問う問題の作成を継続して促し、割合(点数換算)のみならず、より良い問題の作問に繋げたい。
--	---	-------------------------------	--

**【重点目標3】 学習、進路、生活、部活動等を有機的に結びつけ、より自立的内発的に取り組むことのできる、実践力のある生徒を育成する。**

具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の対応
① 中学校と連携しながら、三点固定(学習開始時間、就寝時間、起床時間の固定)を図り、生活リズムを自ら整える態度を身につけさせる。	遅刻をする生徒は一日平均で A 5人未満である B 6人未満である C 7人未満である D 7人以上である  「下校時間を守っている」生徒の割合が A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である	遅刻調査(4～7月) 1日平均の遅刻者数6.9人 【判定：C】  学習・健康・生活に関するアンケート(7月) 下校時間を守っている生徒 全学年平均88.2% 【判定：B】	1日の平均遅刻者数は昨年同期の4.1人から6.9人と大幅に増えた。体調不調での遅刻が昨年の94件から309件と3倍以上に増えたことが原因である。寝坊などの遅刻が若干減っており、担任・学年・保健室・相談室等と連携を密に取り、不登校傾向の生徒への素早い対応と継続的な支援を行っていくことが必要である。 下校時間を守っている生徒の割合は88.2%で、昨年の84.9%から改善が見られた。一昨年の87%と比べても高くこの状態を維持し、今後、学年や部活動顧問と連携しながら90%以上を目指したい。
② 家庭学習時間調査による生徒の自省や様々な視点からの学年集会及び講演等における示唆を通じて、学習意欲を高めるとともに、生活全般において自立的・内発的な行動をとることができるように働きかける。	目標時間を達成している生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	学習・健康・生活に関するアンケート(7月) 目標達成率(平日) 1年67.3% 2年24.7% 3年50.2% 全学年47.7% 目標達成率(休日) 1年43.7% 2年29.8% 3年32.0% 全学年35.1%  【判定：D】	昨年度の目標達成率は平日は1年67.3%、2年17.6%、3年35.4%、全学年40.1%、休日は1年37.7%、2年21.8%、3年17.1%、全学年25.5%であった。3学年とも学習時間が昨年度よりも増えた結果が、目標達成率の増加にも繋がったが、まだ改善の余地がある。予習・復習とリンクした日々の授業設計や学習意欲を持たせる授業を工夫し、自律した家庭学習に繋げたい。(平日の目標時間は1年120分、2年150分、3年240分、休日の目標時間は1・2年240分、3年総体総文後480分)
	「シラバスを定期的に活用した」教員の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	職員アンケート(7月) 「定期的に活用した」59% (単元ごとに活用15%、定期試験ごとに活用44%)  【判定：B】	昨年度は「単元ごとに」7%「定期試験ごとに」55%であった。全体としては2%減少したが、「単元ごとに」が8%増加したことは、少し改善されたと考えられる。一方、生徒アンケートでは「シラバスを活用し、計画的に学習を進めている」生徒の割合は12%(前年比-2%)となっており、活用されていない状況がみられる。今後ともシラバスの活用を計画的な学習に結び付けられるようにしていきたい。
③ 部活動に所属している生徒の積極的な挨拶を核にして、生徒一人一人が自発的に挨拶できるような雰囲気醸成し、気持ちよく授業を受けられる環境を整える。	「学校生活において、挨拶を積極的に行っている」生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート(7月) 挨拶を積極的に行っている生徒 75% (校外からの来校者にも積極的に挨拶している28% +友人や教職員には自分から挨拶している47%)  【判定：B】	生徒アンケートによると、挨拶を積極的に行っている生徒は75%という高い数値結果となったが、保護者アンケートでは挨拶ができていないといった意見も寄せられている。今後も、朝の挨拶運動など学校生活の中で、継続的・日常的に「挨拶」への意識を高めていきたい。ただし、生徒アンケートの中に挨拶運動の廃止を求める意見もあり、方法については一考を要する。
④ 部活動において、限られた時間を有効に活用させることによって、自主性自立性の育成と部活動の活性化を図る。	部活動加入率が A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である  1、2年生で「部活動と学習の両立ができている」と思う生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	部活動加入状況(5月) 1年 男子 96% 女子 95% 2年 男子 84% 女子 89% 3年 男子 89% 女子 83% 学校全体 89.4%  【判定：B】  学習・健康・生活に関するアンケート(7月) 「部活動と学習の両立ができている」 1年 66% 2年 59% 全体 62%  【判定：B】	全学年を通して、部活動加入率が高く、安定した数値となっている。部活動を退部する生徒のほとんどは、学習との両立ができないことを理由として挙げている。部活動は人間形成においても重要な役割を果たしていると考えており、今後も加入率が大きく下がることのないよう、学業成績に伸び悩みを感じている生徒へのケアを大切にしていきたい。参考ではあるが、保護者のアンケートでは「部活動は、学習と両立できるような適切に行われている」と感じているという割合は全体の76%である。

<p>⑤ 生徒会主催の行事を生徒が中心となって企画運営し、今後、社会人として求められる自主的自立的な態度や実践的な行動力を育成する。</p>	<p>「各行事において、生徒の自主性を高める指導を行い、自主性は高まった」と思う職員の割合が  A 80%以上である  B 70%以上である  C 60%以上である  D 60%未満である</p> <p>「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」と思う生徒の割合が  A 80%以上である  B 70%以上である  C 60%以上である  D 60%未満である</p>	<p>職員アンケート（7月）  「自主性を高める指導を行っており、自主性は高まっている」67%  （当てはまる11%+やや当てはまる56%）  【判定：C】</p> <p>生徒アンケート（7月）  「生徒会主催の行事は生徒の自主的な態度を育てている」69%  （当てはまる23%+やや当てはまる46%）  【判定：C】</p>	<p>昨年度と比較すると教職員が7%、生徒が5%、肯定的な評価の割合が減っている。これからの紫錦祭や球技大会等においても、教員が手をかけ過ぎることがないようにして、生徒の「自主性・主体性」を重んじた適切なサポートを行いたい。</p>
<p>⑥ 学校、地域の環境美化に努め、活動に積極的に取り組むことで、環境ISO活動参画の推進と更なる環境保全に対する意識の向上を図る。</p>	<p>3月職員会議「ゴミ排出量&amp;紙リサイクル量」の測定結果報告において、各クラスの年間のゴミ排出量が昨年の量と比較して  A 5%以上の削減  B 3~5%の削減  C 0~2%の削減  D 増加</p>	<p>生徒美化委員による測定値（4月~7月）  可燃ゴミと容器包装プラゴミの合計  28年度 312.4kg → 29年度 328.0kg  昨年比 105.0% (+5.0%)  【判定：D】</p>	<p>4月の学年オリエンテーションでの呼びかけにもかかわらず、全体でゴミの量は増加している。ただし、学年別に見ると、3年生は昨年より7%も減少している（28年度147.0kg → 29年度136.9kg 昨年比93.0%）。美化委員によるゴミ計測が定着し、分別のマナーは良くなっているが、1,2年生の可燃ゴミの中にはプリント類など個人のゴミが多く混ざっていることがある。後期は更に個人ゴミの持ち帰りを呼びかけ、ゴミ削減に結び付けたい。</p>
<p>⑦ 担任、学年、生徒指導室、保健室、相談室、部顧問が十分に情報を共有し、課題や悩みを抱えた生徒を早期に発見し、自発的解決に向けて協力する。</p>	<p>「関係教職員の情報共有により、問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が  A 80%以上である  B 70%以上である  C 60%以上である  D 60%未満である</p>	<p>職員アンケート（7月）  「対応ができています」95%  （よくできている24%+ほぼできている71%）  【判定：A】</p>	<p>「（対応が）できている」という回答は昨年度より5%増えた。しかし、「（対応が）よくできている」という回答に限ると全体の24%にとどまっている。課題や悩みを抱えた生徒の把握が遅かったり、対応が不十分だったりするケースもあり、ホーム担任、学年、生徒指導、部活動顧問など十分に連携し、適切な対応をとっていきたい。</p>
<p>⑧ 学年通信や進路だより等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに、PTA活動や学校行事への参加拡大を図り、家庭との連携を強める。</p>	<p>「学年通信や進路だより・行事案内など学校からの情報を見ている」保護者の割合が  A 80%以上である  B 75%以上である  C 70%以上である  D 70%未満である</p>	<p>保護者アンケート（7月）  「学校からの情報を見ている」75%  （当てはまる34%+やや当てはまる41%）  【判定：B】</p>	<p>学年通信や進路だより発行の際、保護者にメールで通知してきたが、肯定的評価の割合はここ2~3年の間は変わらない。保護者アンケートの自由記述の中に「学年通信などのお便りを子供から見せてもらえない」などとあるように、メールでの連絡の効果は限られている。ただし、PTA行事など保護者に直接情報を伝えた方がよいものは継続してメール配信を続けていく。</p>
	<p>PTA主催の行事に参加する保護者の数が、延べで  A 1,000人以上である  B 800人以上である  C 600人以上である  D 600人未満である</p>	<p>PTA主催の行事に参加した保護者の数は延べで、現在628名である。  【現時点での仮判定：B】</p>	<p>現在の延べ人数は、PTA総会、6月自転車マナー一斉指導、7月進学講座に参加した保護者の合計数である。今後、紫錦祭PTA模擬店、9月自転車マナー一斉指導、9月進学講座などがあり、行事に参加する保護者は増加していくと予測できる。</p>